方向の部分のみ北壁側に残る。

SX6922・SX6923　柱材と思われる丸太（径約18cm）を含む穴。北側のSX6922は東西1.5m×南北40～50cmの横長の穴に、丸太が途切れて数本よこたわる。南側のSX6923は径が60～70cmの穴で、南東よりに丸太が直立する。この両者は中近世の掘立柱建物跡の可能性がある。

SX6924　井戸SE6920掘形の南端部分を攪乱する土坑。東西約2m、南北約1.1mの横長の不整形を呈する。多量の炭とカワラケ小皿が出土した。

SK6933　多量の赤色土器（カワラケ小皿）が投棄されていた南壁沿いの不整形の土坑。

SX6937　発掘区中央で出土した大きな落ち込み。井戸検出面（上層）では楕円形にちかいが、地山面（下層）ではほぼ円形を呈する。南半部分のみ掘り下げたが、井戸検出面から約1m下げても底はでなかった。

地山面で検出した遺構

SD6930　発掘区南半西壁ちかくにあるコ字形の素掘溝。幅は30～35cm、深さ約15cm。

SK6932　SX6931の東側に接する円形土坑。上端の径約130cm。深さ約70cm。底に人頭大の石をおく。

SX6934・SX6935・SX6936　発掘区北半の東壁沿いで検出した隅丸方形の深い穴(底は未検出)。いずれも井戸の掘形もしくは抜取り穴の可能性があり、SX6935とSX6936は一体の遺構かもしれない。

遺物

地山と表土のあいだの土層から、おびただしい量のカワラケ小皿が出土した。一部では、土坑状の落ち込みに小皿が集中的に投棄されていた。SK6933のように、赤く塗られた小皿が集中して捨てられた穴もある。これらの小皿には、完形のものも少なからずふくまれていた。おそらく神社の祓いなどで用いられる一過性の強い器と思われる。瓦は総重量で約215kg出土した。うち中世の軒丸瓦3点、軒平瓦10点、近世の軒丸瓦8点、軒平瓦1点、棟に組み込む小型菊丸瓦3点を含む。

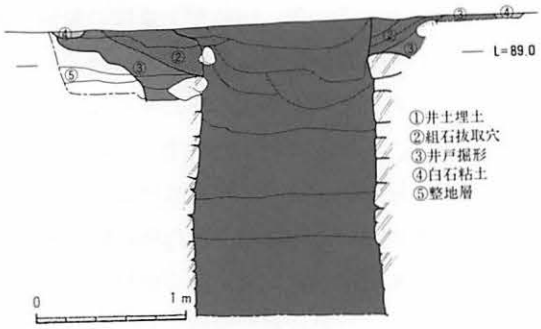

図52　井戸SE6920断面図　1：50

おわりに

調査区では、凹凸のはげしい地形を多量の遺物をふくむ灰褐土で整地し、石組の円形井戸SE6920を掘削している。掘形の出土遺物からみて、SE6920は江戸時代に掘られた井戸であろう。隆遍僧正の大乗院指図にみえる釜屋など雑舎群の北方に近接し、御所の裏方として、釜屋その他に水を供給する施設であったにちがいない。埋土の状況から、奈良ホテルが付属施設を建設する明治末～大正初まで、この井戸が存続したこともあきらかになった。鎌倉時代以来、姿をかえて存続してきた大乗院御所の最も裏方にあたる宅地の様相があきらかになった意義は、けっして小さくないだろう。　（浅川滋男／遺構）

平　城　専（こらむ）欄　③

◆頭塔で27体目の石仏発見

上層頭塔は各面に11基、合計で44基の石仏を配して、造立者の宗教構想を表現していた。このうち、発掘調査着手以前に14基が知られ、従来の発掘調査で12基と抜取り痕跡5ヵ所を確認していた。個々の石仏の図像解釈は、造立構想の復原に不可欠の作業だ。今回、釈迦・多宝仏が出たことによって、東面一段中央の如来も薬師でなく、多宝の可能性が強まり、法華経の影響を取り込んだ華厳経世界観が有力となった。これを実忠の構想とみると、下層の造立構想は、その構造とともに、上層とは相当に異なったはずだ。新たな課題が残された。　（I）